
日本ロシア文学会

関東支部報 No. 35(2017年5月)

〒153-8902 目黒区駒場 3-8-1 東京大学駒場キャンパス 18号館 乗松亨平研究室気付

日本ロシア文学会関東支部事務局

E-mail: knorimatsu@nifty.com

来る2017年6月10日(土)13時より、早稲田大学戸山キャンパス36号館681教室にて、春季発表会が催されます。3本の修士論文成果報告と、5本の博士論文成果報告がおこなわれ、その後、支部総会と懇親会が開催予定です。本報に発表要旨を収録しております。奮ってご参加ください。

13:00-13:05 開会の辞

[修士論文成果報告]

13:05-13:35 石井優貴「シヨスタコーヴィチの創作におけるジャンルの問題：公的評価に対する「明確な」回答としての作品群」

司会：梅津紀雄（工学院大学）

13:35-14:05 大崎果歩「「トルストイによる福音書」——ロシア正教会宗務院訳聖書との比較分析」

司会：渡辺圭（島根県立大）

14:05-14:35 福井祐生「血の繋がった「私」はもうひとりの「私」である：フォードロフ思想における他者の尊重」

司会：大須賀史和（横浜国立大）

[博士論文成果報告]

14:45-15:20 小俣智史「ニコライ・フォードロフにおける技術の思想」

司会：大須賀史和（横浜国立大）

15:20-15:55 佐藤貴之「同伴者作家B・ペリニャーク作品の革命表象に関する研究——文明の黄昏に咲いたロシア文化の花——」

司会：大石雅彦（早大）

15:55-16:30 梶山祐治「ボリス・パステルナーク『ドクトル・ジヴァゴ』におけるモチーフの構造研究」

司会：前田和泉（東外大）

16:35-17:10 鈴木佑也「存在しない建築物の物語からの脱却：建築プロジェクト・ソヴィエト宮殿の実現可能性と頓挫に関する検証」

司会：桑野隆（早大）

17:10-17:45 恩田義徳「文献学とコーパス—古代教会スラブ語の福音書パラレルテキスト作成を通して」

司会：三谷恵子（東大）

17:50-18:20 支部総会

18:45- 懇親会 於「アットン」 <https://atton-t.jimdo.com/>

会費：常勤職（任期付を含む）にある方 5,000円 それ以外の方 3,000円

今年は2017年、ロシア革命百年に当たる年である。その2017年は私には二重の意味で感慨深い年だ。まず第一にロシア革命からもう百年経ったのか、という思い。第二には、その革命の結果生まれたソビエト連邦が革命の百年後に消滅しているとは、という思いである。それは私の学生時代には予想さえしていなかったことである。当時のロシア文学史はロシア文学時代とソビエト文学時代に分けられ、その後再びロシア文学時代が来るとは思いもかけなかった。1991年にソ連が崩壊し、その後生まれた世代の今の学生の多くは、そもそも「ソビエト文学」が何かを知らない。

今から半世紀前の1960年代、世界中の大学で学生運動が吹き荒れ、日本でも街頭のデモ行進ではレーニンの愛唱歌だった「ワルシャワ労働歌」が歌われていた。私が早稲田大学に入学したのは1968年のことだったが、ロシア民謡をロシア語で歌いたかっただけの能天気な学生だった私は、その年の夏に来日することになっていた「アレクサンドロフ記念・ソビエト軍・赤章赤旗歌と踊りのアンサンブル」のコンサートを心待ちにしていた。招聘元は余りに長ったらしいその名称を単純明解な「赤軍合唱団」に呼び換えてコンサートを開くことにしていたが、その直前に、今はもはや存在しないワルシャワ条約軍が、これも今はなき連合国家チェコスロヴァキアの首都プラハに戦車で乗り入れた。芽を出しかけていた「人間の顔をした社会主義」を潰すためだった。この事件に対してソ連政府に正式に抗議声明を出したロシア文学者は少数だったが、それはそのような行動によってソ連に入国できなくなることを恐れた研究者が大部分だったからである。この事件を受けて「赤軍の東京駐留を許すなあ！」と東京を右翼の街宣車が走り回り、演奏会は中止となった。この事件にショックを受けた私はソ連への反発からチェコ語の勉強を始めたが、これが私のスラヴ学の始まりとなった。

ロシア革命の功罪はこれからも様々に論じられることになるだろうが、若かった私たちの世代に魅力的だったのは、文学研究は科学でなくてはならない、とする、言わば方法論の革命を目指したロシア・フォルマリズムの熱気溢れる諸論考だった。ロシア革命を自らの革命として生きたマヤコフスキーと同様、その「革命」はイデオロギーとしてのマルクス主義とはおそらく関係がなく、一挙に世界認識の構図を更新せんとする情熱の表現だったように思われる。しかしそのような文芸批評の運動がロシア革命なしには起こりえなかったのもまた事実であろう。

日本でもその成果は翻訳・紹介はされたが、それを自らの方法として生き、研究に実らせた例は数少ないようにおもえる。その頃日本で書かれ、「革命」の語が頻出する論文の多くが方法論的に少しも「革命的」でないことを学生の私は訝しんでいた。その状況への反発も手伝って私は修士論文でロシアの民俗叙情歌のテキストの構造分析を試みたが、これは民

謡のテキストを文法的レベルからプロットの意味論的分析まで複数のレベルに分けて多層的に分析する、というもので文法的レベルにおいてはヤコブソンに、プロットのレベルにおいてはシクロフスキーとプロップに主に依拠したものだ。私はゴリゴリのフォルマリストとして「革命的」たらんとしていた。ヤコブソンとレヴィ=ストロースによるボードレルの詩「猫」の共同分析の向こうを張ったつもりでいたのだから生意気なものである。

思うに文学・言語研究において形式主義的方法を突き詰めた果てに得られた最良の結果は、音韻を弁別的特徴の束として精緻に記述してみせた構造音韻論であった。しかし、これが形態論、統辞論、意味論、とレベルが上昇するにつれて形式的方法の有効性がいわば「効かなく」なってくる。これはおそらく音韻論の対象は客体としての計量可能な「音響」であり、言語的意味を具体的なコミュニケーションの場で担うのは、主体として他者に呼びかける「声」である、という違いに由来する。計量的な「音」と質的な「声」の違い、と言ってよい。そのことをフォークロア・テキストを分析するうちに気付かせてくれたのは、バフチンの文体論であった。文体とはつまり「声」だからだ。彼は言語学的文体論の自己矛盾を鋭く指摘していた。そのバフチンの研究は多岐にわたっていたが、ラブレール論にしても、小説論にしても、先行研究の常識を十把一絡げに一举に覆してみせる、というまさに革命的なものであった。その研究の影響下に私の関心はテキストの内部からその外に向かおうとしていた…

「革命的」という言葉は現代では廃語に近くなっているが、若い研究者の皆さんに言いたいのは生意気で結構、何かの枠に絡めとられることなく、新しい目で対象を見つめ、自由な「革命児」として研究を進めてほしい、ということだ。ロシア革命百年を迎えた今年、些か惰性で研究を進めている自分への自戒を込めて改めてそう思うのである。

ショスタコーヴィチの創作におけるジャンルの問題：
公的評価に対する「明確な」回答としての作品群

石井 優貴（東大院博士課程）

ソヴィエト連邦の作曲家ドミートリー・ショスタコーヴィチの創作は、その作品に対する公的な批評との複雑な相互関係の中で発展した。作品が持つイデオロギー的な価値が重視されたソ連の音楽批評において、音楽作品の公的価値を定めるための主要な評価基準の1つとして機能していたのが、その音楽作品のジャンルである。特に1948年のジダーノフ批判の時期には、ショスタコーヴィチが頻繁に取り組んでいた音楽ジャンルに対する直接的な批判が行われていた。よって、彼の創作における音楽ジャンルの問題に着目することで、ショスタコーヴィチの創作と、公的な言論の場における音楽へのイデオロギー的評価との間に生じた相互関係の実態を分析することができる。

ショスタコーヴィチの作品を権力との関係の中で解釈する方法として広く受容されているのが「二重言語」という概念である。しかし、ジャンルの問題という視点からの分析により、ショスタコーヴィチ自身の意図や作品の受容を、二重言語による「隠された」メッセージの伝達という枠組みの中では必ずしも説明しきれないことが明らかとなる。

二重言語が機能せずに受容された作品の例として、1940年に作曲されたピアノ五重奏曲と、1950-51年に作曲された《24の前奏曲とフーガ》を挙げることができる。前者は新古典主義的傾向を持つ室内楽曲であり、プラウダ批判以前の彼の作品から引き継がれたジャンルの様式化と言うべき特徴を備えている。これらは、当時の公的批評の場で称揚されていた音楽ジャンルの特徴とは異なる。しかし、この作品はスターリン賞を受賞するなど、公的な批評においても高く評価された。同様に新古典主義的傾向を持つ《前奏曲とフーガ》は、ショスタコーヴィチの創作においても際だった「多ジャンル性」によって特徴付けられ、ジダーノフ批判期に見られる音楽ジャンル評価において否定的に扱われた要素を多く備えている。作品は予想されるべき批判を受けたが、それにも関わらず作曲直後に発表と初演が行われている。

こうした作品が許容され、時には公的な賞賛を受けた背景には、共産党内の政治闘争や経済的な要因から、政治権力が定める音楽作品のイデオロギー的評価の方向性が確固として定まっていなかったという事情がある。その中でショスタコーヴィチは、ジャンルに対する画一的な批判に対する自己の見解を、作品を通して表現していたと考えられる。これは、1960年代以降の彼の公的な場での発言などによって裏付けられる。

ショスタコーヴィチの創作とそれに対する公的評価との関係は、単に公的な批判を受けた作曲家がそれに従い創作の方針を変えるという一方的なものではなく、作曲家は作品の発表によって自らの創作的見解を提示する試みを積極的に行っていた。これは、ソ連音楽が「社会主義リアリズム」という一意に規定された形式にのみ従って発展したという認識に疑問を投げかけ、より詳細な音楽史研究が進むべき方向性を示唆している。

「トルストイによる福音書」
——ロシア正教会宗務院訳聖書との比較分析

大崎 果歩（東大院博士課程）

レフ・トルストイ（1828-1910）は、人生の半ばで宗教的転回を迎えた後、『復活』などキリスト教をテーマとした作品を多く著したことで知られている。だが彼は、そのようなキリスト教的諸作品の執筆に着手する前に、福音書を独自にギリシア語から翻訳、研究し、さらにはその研究成果をひとつの物語としてまとめるという壮大な試みを行っている。そこで創作されたのが、彼のキリスト教観の原点ともいべき聖書の翻案作品、『要約福音書』（1881-83 執筆）である。この作品は、福音書全体をトルストイ自身の言葉で語りなおしたものであるため、そこには彼がいかに福音書を読んだのか、そして、彼は神やイエスをいかなる存在として捉えていたのかが明白かつ網羅的に表れている。本発表の目的は、この『要約福音書』を、当時のロシアで主流であった宗務院訳聖書の訳文と比較することによって、正教会とは異なるトルストイの聖書解釈の特徴を浮き彫りにすることである。

本発表では、正教会がトルストイを破門する際に示した理由を分析の手掛かりとして用いつつ、『要約福音書』のなかに、正教会に真っ向から対立する福音書解釈と、正教会のあり方そのものに対する批判という二つの要素が織り込まれていることを指摘する。前者の具体例としては、奇蹟物語や荒野の誘惑の描き換えを通じてイエスの人性が強調され、その神性が否定されていること、イエスが人の罪を贖う存在ではなく、人々に倫理的な教えを説き、人々を誤った考えから解放する存在として描かれていること、イエスの処女降誕が否定され、復活を示す記述がすべて削除されていることが挙げられる。後者の具体例としては、イエスの敵対勢力であるファリサイ派を正教徒に置き換え、レトリックを用いてそれを正当化することによって、『要約福音書』が誤った正教会のあり方を批判するイエスの物語に様変わりしていることが挙げられる。

トルストイは、福音書の要約という制限付きの枠組みのなかで、表現の細部を工夫することによって、正教会とは全く異なった聖書世界をつくりあげている。権威的なキリスト教の姿に疑念を抱き、聖伝ではなく聖書のみに基づいてひとつのまとまったわかりやすい福音書を作ろうとしたトルストイの姿勢は、単に翻訳者や、聖書を素材に用いる芸術家というよりも、宗教改革者のそれに近い。

正教会の伝統的解釈から大きく逸脱した『要約福音書』はさまざまな批判を呼びおこしたが、この作品のなかで行われた試みは、教会の教理に縛られることなく自由かつ批判的に福音書を読んで新たなイエス像を描き出そうとする 19 世紀ヨーロッパの潮流と呼応する。本発表が明らかにするトルストイのキリスト教観には、19 世紀後半のロシアをとりまく宗教的状況とその危機に対する問題意識が明確に表れていると言えよう。

血の繋がった「私」はもうひとりの「私」である：

フョードロフ思想における他者の尊重

福井 祐生（東大院博士課程）

ニコライ・フョードロヴィチ・フョードロフ（1829-1903）は、これまで地上に生を受けた万人の復活と万人の変容を、万人の参加する共同事業によって実現するというプロジェクトを考え出した。フョードロフは、万人の参加を要求しながらも、それが「全」を構成する個々の「一」の有すべき自由意志に基づかねばならないと考える。これに関して、先行研究では人格や自由の軽視を指摘する立場のある一方、消極的な放埒としての自由を克服した真の自由の実現を評価する立場が存在する。発表者は、前者の批判的な立場から出発しながらも、フョードロフが自分と意見を異にする他者の自由意志を最大限考慮しようとしていることを明らかにする。

本発表で最初に注目するのは、フョードロフが晩年に執筆した小論「世界の終末に関する預言の条件性について」である。フョードロフは、この小論において、クルディスタンやペルシア北西部を中心とするネストリウス派グループ（1898年に正教に改宗したとされる）による、通称「迫害者たちのための祈り」を引用する。そして、この祈りに基づけば「アンチ・キリストの救済までも祈ることができるのではないか」と示唆している。新約聖書の『ヨハネの手紙一』によると、アンチ・キリストは教会共同体から排除され、初めから居なかったものとして無視されることが勧められている。しかしながら、「迫害者たちのための祈り」の中には、己が敵をも自らの同じ一人の人間として認めようとする態度が見出される。フョードロフがこの祈りを評価する限り、自分と意見を異にする他者の存在を無きものとして扱うことは考え難い。これらの者たちを強制によってではなく、説得によって導き入れようとする態度が予想される。

このような態度を裏付けるとともに、フョードロフにおけるリーチノスチの問題を理解するための鍵概念は «родство» である。「родство» は重層的な概念であり、親密な関係性を表す「親和性」、氏族としての纏まりを表す「氏族性」、血の繋がりを表す「血縁性」、のように多様な意味を包含する。本発表では、とりわけ「血縁性」の意味から分析を行う。フョードロフの考えにおいては、此の世に現在生きている者全て、そして既に此の世を去った全ての死者たちは、皆が同じ一族を形成しているとされる。すなわち「血縁性」は、全人類を包摂する普遍的な繋がりとなる。さらに「血の繋がった『私』」は、「もうひとりの私」とも捉えられ、私の存在を拡大する存在として了解される。つまり「血縁性」は、普遍的な繋がりであるとともに、万人の万人に対する、己を愛するが如き具体的な愛によって支えられる相互関係でもある。万人が万人による具体的な愛の対象として、その存在が尊重されるべき者として扱われねばならないことになる。

普遍的復活事業は、ただ一定の計画に万人を従わせるのではなく、他者に対する愛に突き動かされた、一人一人の自発的な行動に支えられたプロジェクトであると言えよう。

ニコライ・フォードロフにおける技術の思想

小俣 智史（早大博士課程修了、早大（非））

ニコライ・フォードロヴィチ・フォードロフ（1829–1903）は、科学技術による死者の復活や人間の宇宙への進出を唱えた思想家として知られ、また近年では「ロシア・コスミズム」と呼ばれる思潮の源流としても注目を浴びている。しかし、その思想はいまだに十分理解されているとは言い難い。その理解を困難にしている一因は、彼の思想の科学技術的側面にある。「復活」や「三位一体」といったキリスト教的タームと SF 小説をすら想起させる科学的空想が混在した彼の思想は、神学者や哲学者のテキストに慣れ親しんだ読者を混乱させる。フォードロフの思想にあたかも科学技術万能主義のような一面が見出されることは、ときには批判の対象ともなってきた。こうした状況は、彼がなぜ科学技術に注目したのかという理由が十分説明されていないために生じていると考えられる。

そこで本発表では「技術」の概念を用いて彼の思想を読み解きたい。ここで重要なことは、「技術」が科学技術を意味するだけでなく、より抽象的・本質的な意味、すなわち人と自然の関係形成という意味をも持ちうるということである。ロシアにおける技術哲学の嚆矢となった П.К.エンゲリマイエルによれば、技術とは人がみずからの生存のために自然（環境）に働きかけるための手段であり、蒸気機関に代表される近代の技術の特徴は自然の諸力の征服であるという。この自然の諸力の征服という技術観は、フォードロフが唱えた自然の盲目的力の統御というアイデアと重なる。

技術にもとづく人と自然の関係について考察する際、重要な役割を担うのが道具の概念である。人と自然の間を技術が媒介するとき、それは道具による媒介というかたちをとる。そして技術とはあらたな道具を作り出すことでもある。フォードロフが説く「自然の統御」はこうした道具の概念により説明されうる。「自然の統御」とは、自然を力ととらえ、そこに人間が理性を持ち込むことにより自然を理性化・人間化することであり、言い換えるならば、自然を道具化することで技術を拡大してゆくプロセスである。そして、フォードロフはこうした技術による自然の道具化のプロセスにおいて、人間もまた神の道具になると考えている。

技術や道具の概念とフォードロフの「自然の統御」というアイデアの親和性は、技術の概念を用いて彼の思想を読み解くことを可能にする。こうした観点からフォードロフの思想を説明するならば、それは技術により神・人・自然の三者間の関係を操作することであり、そこに道具的・代理的關係をつくり出すことである。その関心は、科学技術と宗教（キリスト教）に共通する道具的關係に向けられている。フォードロフは自然を人の道具に変え、同時に人が神の道具に変わるという二重の道具化により、技術にもとづく人と自然の道具的關係を、神・人・自然の三者關係に拡大しようとする。彼の思想の特徴はこの点に見出される。

同伴者作家 B・ピリニャーク作品の革命表象に関する研究

——文明の黄昏に咲いたロシア文化の花——

佐藤 貴之（東外大博士課程修了、東外大（非））

ロシアは東洋であり、同時に西洋でもある。ピョートル大帝の治世以降、ロシア社会は西欧諸国の文物を盛んに受容し、絶え間ない西欧化を経験してきた。それと同時に、ロシアは十三世紀にモンゴル軍にカルカ河畔の戦いで大敗を喫して以来、アジアによる長い支配の歴史を持つ。タタール・モンゴルによる支配が与えた影響は議論を呼んだが、二世紀半にわたる支配の歴史が拭いがたい東洋の特徴をロシア文化に植え付けたことは確かである。そして 1917 年の十月革命という歴史の大転換は、「西か東か」の文化的パラダイムを再考させる展望をインテリゲンツィヤに用意した。その中でも「革命の同伴者作家」と呼ばれたボリス・ピリニャークはロシア・アヴァンギャルドの芸術家たちが新世界建設の熱狂に沸いているさなか、ロシア文化の源流を求めて近代化以前の世界を探求した作家である。その作品世界は、革命後の文壇で生じた歴史哲学上の議論を色濃く反映しており、東西の間で揺れ動くロシアの文化的アイデンティティを探るうえで重要な視点を提示している。

そこで本研究ではピリニャークが作家として本格的に活動開始する 1915 年からスターリンの全体主義時代に突入する 1930 年の「偉大なる転換」までの時期を取り扱い、革命を通じたロシアの精神的再生を夢見たピリニャークの挑戦と葛藤を分析した。本論は以下の三章で構成されている。

第一章ではピリニャークが創作活動を開始する 1915 年から代表作『裸の年』が発表される 1922 年までの時期を取り扱い、「同伴者作家」と呼ばれたピリニャークの文化的・思想的・政治的背景に迫った。

第二章では革命期のペトログラードで興ったサークル「スキタイ人」の活動がピリニャークに与えた影響を考察した。スキタイ主義は革命を支持したとはいえ、反共の思想運動だったことから、ソ連時代には研究が一切行われなかった。近年では B・ベロウス、Я・レオンチエフが中心となって再評価活動を行い、革命期ペトログラードにおける文芸活動の全貌を明らかにする上で重要な業績を残している。従って、本論ではこれらの研究を土台としてスキタイ主義の運動がピリニャーク作品に与えた影響を明らかにした。

第三章では 1924 年から 1930 年の間に執筆されたピリニャーク作品を扱った。この時期はその実験文学が創作上の危機に陥った時期である。1920 年代後半にかけて国家的文化統制が勢いを増す中で、ピリニャークは時代の流れに逆行し続けることができず、「鋼鉄のロシア」を築き上げるスターリンとの対話を試みるが、この時期の作品を分析することで、革命の運命を見極めようとしたピリニャークの挑戦と葛藤が明らかにした。

本博士論文は、ボリス・パステルナークの長編小説『ドクトル・ジヴァゴ』について、序章に続く 4 つの各章において、異なるモチーフを用いた異なる方法による分析を試みている。

第 1 章「モチーフ機能とプロット解釈」では、四大すなわち火、空気、大地、水の各モチーフの用例から帰納的に得られた各機能を用いて解釈を行う。パステルナーク作品における自然の重要性についてはしばしば指摘されながら、個々のモチーフが果たす役割について論じられることはきわめて少ない、という事情を考慮したもので、主にプロット面における個々のモチーフの働きを明らかにする。

第 2 章「意味の変化するモチーフ」では、「未来 будущее（あるいは грядущее）」の使用例を調べ、テキスト上の意味の変化をモチーフとみなして辿る。そこで観察されるのは、当初、登場人物たちによって肯定的に言及されていた「未来」が、次第に希望や期待のニュアンスを失っていき、否定的な意味の言葉に転じていく様子であり、ユートピア文学ないしアンチユートピア文学という、この小説の注目されることのほとんどない側面についても考える。

第 3 章「モチーフがつくる舞台」は、演じる存在として繰り返し描写される少女時代のヒロイン、彼女から第四の壁によって隔てられた少年時代の主人公、成人した彼が執筆する内容が明かされることのない「演技」という名の原稿など、それらを「演じることのモチーフ」と呼び、同モチーフが作品世界の土台となっている様子を観察し、『ドクトル・ジヴァゴ』が一種の世界劇場として存在することを指摘する。

第 4 章「父と母のプロット」では、重要性が一見してわかる「母」とつねに稀薄な存在に留まっている「父」に焦点を当て、作品世界のなかでは偏ってみえる「母」と「父」の均衡が、主人公が遺した「ユーリイ・ジヴァゴ詩篇」中の大文字の「父」＝神によって、散文テキストにおける「父」の不足分を補っていることなど、作者の父であるユダヤ系のレオニードが代表した旧約聖書的世界観を克服する、新約的世界観の提示について論じる。

終章では、第 1 章から第 4 章にかけて基本的に独立しておこなってきた読解のモチーフが、『ドクトル・ジヴァゴ』において同時に存在していることを示す。第 1 章から第 4 章にかけて扱ったモチーフたちは、それ自体が完結した小説の新しい読み方を提示するものである。くわえて、ここで明らかになるのは、複数のモチーフが織物のように組み合わせられ複数のプロットから成る物語として形成されている事実である。それは、様々な読み方が可能であることがたびたび指摘されてきたこの小説に対して、異なるモチーフによって意味の多層的なテキストをさまざまな角度から照射して浮かび上がらせるという、本研究が選択した読み方の結果得られたものである。

存在しない建築物の物語からの脱却：

建築プロジェクト・ソヴィエト宮殿の実現可能性と頓挫に関する検証

鈴木 佑也（東外大博士課程修了）

本報告は、報告者の博士学位論文「建築プロジェクト・ソヴィエト宮殿の全体像と建設に関する研究：狂想と国家を双肩に担ったモニュメント」を基に、建築プロジェクト・ソヴィエト宮殿の実現可能性と頓挫した理由を検証するものである。建築プロジェクト・ソヴィエト宮殿に関する先行研究では、ソヴィエト建築史上最大規模を誇るこのプロジェクトの建築競技設計を対象としたものが多い。また競技設計後の建設に向けた最終設計案を対象としたものであっても、ある種の文化表象としての分析に限られていた。その理由として挙げられるのは、首都モスクワ再編の中心的建築物として、また政治機構の名を冠した国家的な建築物としての意義がより重要視されたためであった。その際にモニュメントとしてソヴィエト宮殿の外見、この外見を中心に据えて形成されるであろう新しい首都モスクワのイメージ、そしてこのモニュメント建設に関連した言説が当時のソヴィエト政権の威容と重ね合わせられるかたちで人口に膾炙した。一大国家建築プロジェクトとしての理由付けがイメージ及びそれを生み出す言説によって語られてきたと言える。こうした点はソヴィエト宮殿の一面を捉えてはいる。だが一方で、この建築プロジェクトが存続した期間の大半を占める建設段階については触れることはなく、先行研究で扱われることはほとんどなかった。建設段階では建設技術や設備、建築材料において、国家を代表する建築物に相応しい当時の最先端のものが取り入れられていた。こうしたことはソヴィエト宮殿のイメージを補強するものとも言えるが、その実現可能性を担保していたという事実を示すものでもある。本報告ではこの「実現可能性」、具体的には建設技術的側面、資金・運営的側面、インフラ的側面から建築プロジェクト・ソヴィエト宮殿の再解釈を試み、実際の建築物としてソヴィエト宮殿が一大国家建築プロジェクトに資するものであったかを検証する。またこの建築プロジェクトが頓挫した理由も検証する。ここでは当時の建築界事情や政治家と建築家の関係性から考察するのではなく、より具体的にアーカイブ資料を基にして建設現場での問題点、第二次世界大戦勃発による建設資材と人的資材の他事業への供給、さらにこの建築プロジェクトの意義の低下理由を検証する。こうしたことによって建築プロジェクト及び建築物としてソヴィエト宮殿が抱えていた問題点が浮き彫りとなり、本報告はソヴィエト宮殿の実像を正確に定める一助となるであろう。

文献学とコーパス

—古代教会スラブ語の福音書パラレルテキスト作成を通して

恩田 義徳（東外大博士課程修了）

言語学の研究にとってコーパスの利用が当たり前になって久しいが、文献学の対象となるようなテキストを電子化する場合、どのような意味があるだろうか。本報告では古代教会スラブ語のコーパスの加工・利用を通して、いわゆる死語のコーパス化について考える。

現代語のコーパスは、例えばロシアナショナルコーパスなどを見ても明らかなように、言語データの電子化に際して文法タグを付与したり、ジャンルを分けるなどの作業が行われる。これによってテキストにさまざまな情報が加えられ基となる言語データよりも情報量において「拡大した」テキストとなる。それに対して文献学の対象となる資料を電子化する場合、一次資料である写本に含まれる情報のすべてを電子化することは難しい。例えば写本における飾り文字や、略字、その他の記号類はある程度記号によって示すことはできても、字形の違い（写し手の違い）、文字の色、テキストの状態（判読不能箇所の有無など）、余白の書き込みなどの情報はほとんどが失われてしまう。文献学上重要となるこれらの情報は、紙媒体のテキストでは通常注によって示されるが電子化されたコーパスではこれらの情報を得ることはできない。電子化により検索等の利便性が増し、個人の目的に応じてテキストを加工することができることは大きなメリットである。しかし得られる情報に決定的な違いがあり、研究の目的に合わせて従来の紙媒体でのテキストを併用することが必要となる。

また既存の電子コーパスの加工例として、博士論文執筆の際に作成した福音書のパラレルテキストについて紹介し、それによってどのような研究が可能となるか、またどのような点で注意が必要となったかについて報告する。